

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター 所長

令和2年度病害虫発生予報第11号について

令和2年度病害虫発生予報第11号を発表したので送付します。

令和2年度病害虫発生予報第11号

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

○ 発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	1 いもち病（苗いもち）	—	2
	2 スクミリングガイ	—	2
施設野菜全般	1 病害全般	—	2
冬春きゅうり	1 うどんこ病	並	3
	2 べと病	並	3
	3 灰色かび病	並	3
	4 褐斑病	少	3
	5 黄化えそ病	やや少	4
	6 ミナミキイロアザミウマ	少	4
	7 病害虫全般（改植時の留意点）	—	4
冬春ピーマン	1 うどんこ病	やや多	5
	2 斑点病	並	5
	3 黒枯病	並	5
	4 ミナミキイロアザミウマ	やや少	5
	5 ヒラズハナアザミウマ	多	5
	6 タバココナジラミ	やや多	6
冬春トマト	1 葉かび病	並	6
	2 すすかび病	並	6
	3 灰色かび病	並	6
	4 タバココナジラミ	やや多	7
冬春いちご	1 うどんこ病	並	7
	2 ハダニ類	やや少	7
	3 アブラムシ類	やや多	8
	4 ヒラズハナアザミウマ	やや多	8
カンキツ （露地栽培）	1 そうか病	並	8
	2 かいよう病	並	8
	3 ミカンハダニ	やや少	8
茶	1 カンザワハダニ	並	9

○ 作物の生育状況（2月中旬）

冬春きゅうりの促成栽培は収穫期、半促成栽培は定植期、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春いちごは収穫期であった。

○ 向こう1か月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	10	20	70
降水量	30	40	30
日照時間	20	40	40

(1か月予報 鹿児島地方気象台2月18日発表)

○ 発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1 いもち病(苗いもち)

[防除上の注意]

(1) 育苗時の発生の有無に関わらず、移植時の箱施薬を必ず実施する。

2 スクミリングガイ

[防除上の注意]

(1) 水田に生息する貝は、耕耘により破砕し防除する。この場合、土壌は硬いほど、耕耘ピッチは小さいほど、貝は大きいほど殺貝効果が高い。貝が主に越冬生息している土壌表層部を細かく耕耘することで殺貝効果が高まる。

(2) 用排水路からの侵入を防ぐため、水の出入り口にネットを設置する。

(3) 田植後2～3週間は、できるだけ水深1cm以下の浅水管理とする。

(4) 貝の生息量が多い場合には、薬剤の育苗箱施用や本田施用を実施する。

施設野菜全般

1 病害全般

(1) 病害が多発してからでは薬剤による防除効果が劣るので、初期防除を徹底する。

(2) 九州南部の1ヶ月予報では、平年に比べ気温が高い。

そのため、病害の発生に好適な気象条件である。気温の変化等には細心の注意を払い、適宜換気をするなど施設内の温湿度管理を徹底する。

(3) 夜温が高めに推移し、加温機が稼働しない日が続く場合は、施設内が多湿になり、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意が必要である。

また、燃油コスト低減のため多重・多層被覆にしているところでは、夜間に加温機の作動回数が減少するため、高湿度時間が長くなり、さらに発生が助長される可能性がある。

(4) 草勢の低下は各種病害の発生を助長するので、草勢の維持管理に努める。

きゅうり：べと病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病、褐斑病など

ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病、軟腐病など

トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

冬春きゅうり

1 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率：16.7% (平年 30.9%、前年 35.7%) 平年よりやや少

発病葉率：3.4% (平年 4.5%、前年 3.0%) 平年並

[防除上の注意]

(1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。

(2) 耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

(3) 乾燥時に発生が多くなるので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

(4) 半促成栽培でも急速に病勢が進展することがあるので、促成栽培と同様の注意が必要である。

2 べと病 (並)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率：66.7% (平年 63.0%、前年 78.5%) 平年並

発病葉率：15.1% (平年 14.5%、前年 15.4%) 平年並

[防除上の注意]

(1) 多湿条件で発生しやすく、発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防散布に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底する。

(2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

(3) 多発時はべと病を対象とする専用の殺菌剤を使用し、新葉の展開に合わせて葉裏まで、薬液が十分付着するよう丁寧に散布する。また、多発時の1回散布では、防除効果が現れにくいことがあるので、7日間隔で2回以上の連続防除を実施する。

3 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率：0% (平年 1.6%、前年 0%) 平年並

発病果率：0% (平年 0.1%、前年 0%) 平年並

[防除上の注意]

(1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下を図り、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。

(2) 花卉等の発病に注意し、予防及び発病初期の防除を徹底する。

(3) 耐性菌が発生しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4 褐斑病 (少)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率：0% (平年 17.5%、前年 0%) 平年より少

発病葉率：0% (平年 2.1%、前年 0%) 平年より少

[防除上の注意]

(1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。

(2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し過繁茂になって通風を妨げるが、逆に少ない場

合は草勢低下を招き好ましくないので、適正な肥培管理に努める。

- (3) うどんこ病、べと病の発生後には激発することがあるので、両病害の防除を徹底する。
- (4) 摘除した発病葉は、ほ場外に持ち出し処分する。

5 黄化えそ病（MYSV）（やや少）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率：0%（平年 24.6%、前年 0%）平年よりやや少

発病株率：0.0%（平年 0.1%、前年 0%）平年よりやや少

[防除上の注意]

- (1) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬されるため、発生後は急激には場内外に蔓延する恐れがある。ミナミキイロアザミウマの防除対策については、次項を参照のこと。
- (2) 感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し、完全に枯れるまで密封処理する。
- (3) 改植時には、後述「7 病害虫全般（改植時の留意点）」を参照のこと。

6 ミナミキイロアザミウマ（少）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率：25.0%（平年 56.4%、前年 57.1%）平年より少

100葉当たり虫数：1.6頭（平年 18.7頭、前年 14.9頭）平年より少

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。
- (2) 施設内では、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので最少でも7日間隔で3回の連続防除を行い、多発しているときは更に連続した防除を徹底する。

7 病害虫全般（改植時の留意点）

[防除上の注意]

- (1) ウイルス病を媒介するタバココナジラミやミナミキイロアザミウマに対しては、以下のことに留意し、次作の発生源を絶つように努める。
 - ①害虫の発生密度が高い場合は、前作きゅうりの栽培を終了する前に殺虫剤を散布する。
 - ②栽培を終えたら、ハウス内の除草を徹底するとともにきゅうりを完全に抜根する。
 - ③抜根後20日間以上蒸し込み、雑草を含めた媒介虫が生存できる植物をなくす。
 - ④蒸し込み期間中は、有色粘着板を設置し成虫を捕殺する。
 - ⑤後作きゅうりの定植時には、必ず薬剤を施用する。
- (2) 前作に褐斑病などの発生があった場合には特に注意し、定植後直ちに予防防除し感染を防ぐ。
- (3) 苗の購入の際は、病害虫の発生状況を十分確認する。特にミナミキイロアザミウマが寄生していたり被害痕が多い苗は避けるとともに、ウイルス病の発生が疑われるときは直ちに株を破棄する。

また、農薬の散布履歴を確認し、育苗期に粒剤の使用がない場合は直ちに施用する。

冬春ピーマン

1 うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率：54.6% (平年 38.8%、前年 10.0%) 平年よりやや多

発病葉率：8.6% (平年 6.2%、前年 1.2%) 平年並

[防除上の注意]

(1) 乾燥した条件で発生しやすいので、過乾燥に注意する。

(2) 本病菌は組織内部に侵入して繁殖し、他の作物のうどんこ病のように葉表が白粉をふりかけたようにはならないので、葉裏を中心に観察し早期発見に努める。

(3) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、発病を確認したら早めに防除する。

(4) 上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、1回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、7日間隔で2回以上の防除を実施する。

(5) 初期の発病葉はほ場外に持ち出し、伝染源にならないよう適切に処分する。また、薬液の付着率向上を目的に、生育に影響の無い下葉はできるだけ除去する。

2 斑点病 (並)

(1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率：54.5% (平年 27.8%、前年 30.0%) 平年より多

発病葉率：1.6% (平年 4.2%、前年 0.8%) 平年よりやや少

[防除上の注意]

(1) ハウス内が高温多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。

(2) 病原菌が植物体に侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

3 黒枯病 (並)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率：0% (平年 0%、前年 0%) 平年並

発病葉率：0% (平年 0%、前年 0%) 平年並

[防除上の注意]

(1) ほ場内が多湿条件にならないように、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。

(2) 被害茎葉、果実は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処理する。

4 ミナミキイロアザミウマ (やや少)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率：9.1% (平年 22.2%、前年 0%) 平年よりやや少

10花当たり虫数：0.1頭 (平年 0.6頭、前年 0頭) 平年よりやや少

[防除上の注意]

(1) ミナミキイロアザミウマの成虫が10花当たり1頭程度寄生すると、販売等級格下げとなる果実が5%発生するので、発見したら早めに防除する。

(2) ミナミキイロアザミウマのその他の注意事項については、きゅうりのミナミキイロアザミウマ(4ページ)を参照のこと。

5 ヒラズハナアザミウマ (多)

(1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率：91.0% (平年 51.2%、前年 80.0%) 平年より多

10花当たり虫数：24.8頭 (平年 12.9頭、前年 25.8頭) 平年よりやや多

[防除上の注意]

- (1) ピーマンの花数が減少する時期が防除適期となるので、この時期を逃さず、防除の徹底を図る。

また、ヒラズハナアザミウマは、主に花の内部に生息することから、薬剤防除は、薬液が花の内部にしっかり付着するように行う。薬剤の付着性を高めるために、展着剤を加用する。

- (2) ミナミキイロアザミウマに対し天敵スワルスキーカブリダニによる防除を実施しているほ場において、ヒラズハナアザミウマの発生が多い傾向にある。生息密度が高まる前に、天敵に影響の低い薬剤を用いた防除を実施する。

6 タバココナジラミ（やや多）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 9.1% (平年 12.0%、前年 30.0%) 平年並

100葉当たり虫数 : 3.2頭 (平年 0.6頭、前年 1.1頭) 平年より多

[防除上の注意]

- (1) 雑草はタバココナジラミの生息・増殖場所となるため、施設内及びほ場周囲の除草を徹底する。特に暖房機の下や内サイドビニルと外ビニルの間などは見落としがちなので注意する。
- (2) 低密度のうちに防除を実施し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- (3) 有効な薬剤に対する抵抗性の発達を回避する観点から、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低い微生物農薬や物理的に窒息死させる気門封鎖剤を利用する。

冬春トマト

1 葉かび病（並）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 10.0% (平年 17.6%、前年 30.0%) 平年並

発病葉率 : 0.2% (平年 3.3%、前年 3.3%) 平年よりやや少

2 すすかび病（並）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 20.0% (平年 16.0%、前年 20.0%) 平年並

発病葉率 : 3.1% (平年 1.6%、前年 5.1%) 平年よりやや多

[葉かび病・すすかび病の防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- (2) 発病葉は感染源となるため、生育に支障がない限りできるだけ摘葉し、圃場外へ持ち出し適正に処理する。
- (3) 初期の防除を徹底する。

3 灰色かび病（並）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査結果

株での発生状況

発生面積率 : 0% (平年 33.0%、前年 0%) 平年よりやや少

発病株率 : 0% (平年 6.1%、前年 0%) 平年より少

果実での発生状況

発生面積率：0%（平年 9.2%、前年 0%）平年並

発病果率：0%（平年 0.3%、前年 0%）平年並

〔防除上の注意〕

- (1) 低温多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下を図り、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- (2) 花卉の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4 タバココナジラミ（やや多）

〔予報の根拠〕

- (1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率：30.0%（平年 36.2%、前年 50.0%）平年並

100葉当たり虫数：5.3頭（平年 2.1頭、前年 2.5頭）平年より多

〔防除上の注意〕

- (1) 冬春ピーマンのタバココナジラミ（6ページ）を参照のこと。

冬春いちご

1 うどんこ病（並）

〔予報の根拠〕

- (1) 2月中旬の巡回調査結果

葉での発生状況

発生面積率：8.3%（平年 24.5%、前年 16.7%）平年よりやや少

発病葉率：0.8%（平年 2.0%、前年 0.7%）平年並

果実での発生状況

発生面積率：0%（平年 11.7%、前年 0%）平年並

発病果率：0%（平年 0.6%、前年 0%）平年並

〔防除上の注意〕

- (1) 葉裏に発生しやすいので、早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- (2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くする。
- (3) 発病果など被害部は伝染源になるので、ほ場内に放置せず、早めに除去する。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

2 ハダニ類（やや少）

〔予報の根拠〕

- (1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率：50.0%（平年 71.1%、前年 58.3%）平年より少

寄生株率：11.8%（平年 22.2%、前年 16.0%）平年よりやや少

葉当たり虫数：7.6頭（平年 6.7頭、前年 2.2頭）平年並

〔防除上の注意〕

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- (2) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時にはノズルや散布圧を調整して、葉裏に良くかかるように散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

3 アブラムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 33.3% (平年 25.9%、前年 25.0%) 平年よりやや多

寄生株率 : 5.2% (平年 2.8%、前年 0.8%) 平年よりやや多

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- (2) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時にはノズルや散布圧を調整して、葉裏に良くかかるように散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

4 ヒラズハナアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 33.3% (平年 15.1%、前年 0%) 平年よりやや多

寄生花率 : 4.2% (平年 1.6%、前年 0%) 平年よりやや多

(2) 寄生花率10%以上で被害果が発生する恐れがある。

[防除上の注意]

- (1) 本種の果実への加害は、3～4月以降に顕著に認められるので、低密度時に防除対策を講じる。
- (2) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。
- (3) 青色粘着板を設置し、誘殺による継続的な密度低下を図る。

カンキツ(露地栽培)

1 そうか病 (並)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 0% (平年 1.1%、前年 0%) 平年並

発病葉率 : 0% (平年 0.1%、前年 0%) 平年並

[防除上の注意]

- (1) 越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
- (2) 春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいので、発芽初期の防除は必ず行う。

2 かいよう病 (並)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 5.6% (平年 5.0%、前年 0%) 平年並

発病葉率 : 0.4% (平年 0.4%、前年 0.1%) 平年並

[防除上の注意]

- (1) 越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
- (2) 防除は予防散布が原則である。

3 ミカンハダニ (やや少)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 22.2% (平年 32.3%、前年 33.4%) 平年よりやや少

寄生葉率 : 1.7% (平年 5.5%、前年 5.8%) 平年よりやや少
100葉当たり虫数 : 5.3頭 (平年 39.4頭、前年 13.2頭) 平年よりやや少

[防除上の注意]

- (1) 越冬密度の高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、春季 (3 月上～中旬) にマシン油乳剤による防除を行う。

茶

1 カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

- (1) 2 月中旬の巡回調査結果

摘採面

発生面積率 : 30.8% (平年 21.6%、前年 38.5%) 平年よりやや多
寄生葉率 : 0.8% (平年 1.1%、前年 1.2%) 平年並
100葉当たり虫数 : 2.0頭 (平年 2.8頭、前年 2.3頭) 平年並

すそ部

発生面積率 : 38.5% (平年 60.8%、前年 38.5%) 平年よりやや少
寄生葉率 : 3.8% (平年 5.1%、前年 1.5%) 平年並
100葉当たり虫数 : 19.2頭 (平年 20.6頭、前年 2.5頭) 平年並

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は増殖が始まる前の密度の低い時期 (2 月下～3 月中旬) になり、葉裏に十分な薬液が到達するように丁寧に散布する。

○ その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認してください。

宮崎県農薬安全使用啓発ホームページ

<http://nouyaku-tekisei.pref.miyazaki.lg.jp/nouyaku/user/top/miyazaki>

日本植物防疫協会

<http://www.jpnpn.ne.jp>

農林水産省 (農薬コーナー)

<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センター

<http://www.acis.famic.go.jp/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
3 短期暴露評価の導入により農薬の使用方法が変更になるものがありますので注意してください。

- 4 発生量 (程度) の区分

多	い	(高	い)	やや多いの外側 10% の度数の入る幅
やや多	い	(やや高	い)	平年並の外側 20% の度数の入る幅
平年並				平年値を中心として 40% の度数の入る幅
やや少	ない	(やや低	い)	平年並の外側 20% の度数の入る幅
少	ない	(低	い)	やや少ないの外側 10% の度数の入る幅 (平年値は過去 10 年間の平均)

- 5 予察情報の種類

病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の 5 つです。

- (1) 予 報・・・向こう 1 か月の発生状況を予測し、毎月 25 日前後に発表する。
(2) 注 意 報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
(3) 警 報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合

に発表する。

(4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。

(5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

○ お知らせ

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。
ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。



【文書取扱】

病害虫防除・肥料検査センター 松浦

TEL:0985-73-6670

FAX:0985-73-2127

E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp